

# 日本大学吹奏楽研究会 O B 会 報

— 創刊号 —

## O B 会について思う

佐藤力男

O B 会という言葉は誰れが作ったか知らないが、簡単な略語で妙を得ていると思う。大学を基準とした(それぞれの会、組織によって異なるが)O L D、B O Y の異だから、至極、ごもっとも立話であるが、直訳すれば、「年寄り少年」ということであって、年寄りではない、少年なのである。

ここに、この言葉の妙があり、O G (O L D G I R L) のニューアンスにない、青春の微笑えまじさが漂う。O G の言葉には、O L D M I S S という女性に不著名な言葉と共通するものがある。言葉自体のユーモアがあるものも無いものではない、こんなに略語でも感覚的に違うのである。

学生時代、共に日本大学吹奏楽研究会という場で過したことが、このO B 会に参加する資格なのであるが、とかく、このO B 会の本趣から離れてO L D になる危険性がある。そのO L D になる危険性は、若さを忘れ、又、自己の意図から老化現象を身につけることなのである。これは卒業後の仕事の分野にもよるであろうが、貫録という言葉で、現役に、現役に対し、もったいぶったり、現役のとき持っていた立派な人格をも放棄する人があるこれはO B 会の会員として失格であり、メンバーとしての意識喪失である。

O B 会は常に共通の基盤である日本大学吹奏楽部員ということのを忘れないで貰いたい。常に学生時代に持っていた若さ、そして組織の中で立派に自分の個性を発揮していたピッコロ、サザーフォンに徹して貰いたいのである。

よく現役と会ったO B 諸君から「現役は変わった、小粒だし、ファイトが無い」又、現役からは、「現実ばなれた話だと思えます」と聞く、これは、お互の会話を通じ、懇親を通じていても一方通行であることを証明している。

例え、会話の時間が少くとも、吹奏楽の基盤から、お互いに相手の首を聞いて調和し、立派な音楽演奏を行うとするなら、当然、相手の真意を聞き、又、相手に真意を伝える努力がなされなければならないのである。

今年の新年会でも、新しいO B が古いO B から酒を媒介として立派なマナーで意見を聞き、又、自己主張していた、吹奏楽を地で行っている姿である。

O B 会も自己の努力がなかったら、その会から価値を得ることは少ない、又

魅力も感じないと思う、O B 会で新しいO B、又は現役から現在の若さ、思考方法などを汲み取れる人はやがて育ちくる自分の子供との対話で立派な指導力を発揮するものと思うし、又、現役が、古いO B などから、生きた歴史を汲み取ることができると思えば、身近な発展理論を自己の実践する場、吹奏楽研究会活動に還元できることになる。

二十周年も近づいている、O B 会のステージも近い、このステージ構成に今から夢がわいてくる。

O L D B O Y らしい演奏は想像したのみで、笑いあり、涙ありである。

ジュニアのステージなども考えられることである。

## 歴史 — ある日地震が起きた —

37年度 土岐悦康

五月十六日「十勝沖地震」は突如として起った。新聞、ラジオ、テレビ等は現地実情を出来得る限り報道した。それは鉄道の遮断、道路網の各所遮断、電信電話不通の中で、報道関係者の懸命の努力、使命感によってより詳細を極めることに責務を全うさせられた。遠隔地において微動だに感受しなかった人々も、弱震程度で驚いた地方の人々も、刻々とあがって来る被害の実情に目をみはり、耳をそばだて、徐々に興奮の渦にのまれて行った。

「皆にカンパを呼びかけよう」Kは耐えきれぬ面持ではき出すようにいったそれは自分の気持をもう一度確認する言葉だった。幸いその朝はこれといって仕事もなかったが、そんな事はどうでもよかった。職場に携帯された各新聞の中から、現地の痛ましい写真と記事、被害状況の一覧表をもどかしげに切り抜き、ランヤ紙に貼り付けた。「被災地の子供たちに下着、靴下などを送りたい」旨を記して、よびかけは出来上った。

この間、労働組合の一幹部から中傷が入った。「本部から義捐金カンパの指今が来る筈だから、分派活動はするな」、「指令が来たら合流しましょう」けれども本部の指令は「被災地救援を組織内に限る」として職場に流されて来たのだった。職場では組合のカンパだからと些少の金をカンパに回す姿があったが、中には「組織内」に限定するなど抵抗を感じるといって拒否する者も居た「それなら僕らよびかけの方にお願い下さい」「うん良いよ」よびかけてから一週間で締めると一、五〇六円あった。しかしKにとって何となく割り切れなものは一円玉や五円玉に混って、新しい千円札が一枚丁寧に折られて入っていたことである。僅かな給料、小遣いの中から何人かの心によって入れられた五〇六円と一枚の千円札。何故かKには千円札の薄さを感じながら郵便局へと歩いた。

一週間のよびかけで一、五〇六円。既に組合としてのカンパも回ったことではあるし——ということで同僚と相談の結果縮切り、東京の商店は既に夏物商品に切り換えられているので、そのまま現金を送ることにした。郵便局では、NHKのたすけ合い運動なら無料ですよという。「五戸の町役場宛に送りたいんですけど」——八戸市の中心部は被害も大きいとはいいながら、救援の手も回り、復旧も急速に進められているということだが、いわゆる郊外は田畑の被害が致命的、まして救援の手も遅れがちのことでは非ともそういう所に物心の励ましを送りたいという気持であった。「それなら現金書留にしないとだめですね——細かい金を五番でお札と両替してもらった方が良いでしょう」親切にいつてくれた窓口と変って五番の窓口では「両替はやっていないのだが……」と渋い顔をした。他の事ではないし何か……と頼み込んで五百円を札に替えてもらおうと五戸町役場御中としたためて投函、心もさわやかに……という訳には行かぬ割り切れぬ気持が、又被害地を思っ、更に暗く重くなって行くのだった。

政府は現地視察もそこそこに、ただ「見て来た」だけの冷たい態度で「激しい災害」適用についてもめ、改正をするのしないのとか、地震探地の方法について今更のように云々している——と新聞等の報道で明らかにされ、いつものことながら「泥縄式」の行政にKはいきどおりを感じた。こういう不慮の災害に対してこそ、自分たちの税金が有効に使われねばならぬのではないか。始終墜落するジェット機を高い金を出して買い込み、庶民のわずかな嗜好である酒・煙草を一方的に値上げし、健康保険も個人負担を値上げして、そうしてほんとうに困っている人にさしむけるべき手を控えるとは……あれこれ考えて夜明けまで寝つかれぬこともあった。

新聞等も既に他の記事で紙面は埋められ没交渉となった他地域ではもはやそのことは一つの物語でしかなくなってしまうようである。願うことではないが、今度またこのような惨事が起るまで思い出されぬことになったのであるか。現代の歴史とはこのようなものなのか。





